

### 第3章 馬頭町広重美術館と地域コミュニティ

#### 第1節 馬頭町広重美術館の設立経緯

##### (1) 青木コレクション寄贈の経緯

###### 青木コレクションの概要

歌川広重の肉筆画や川村清雄の洋画など貴重な美術品の数々は戦前佐久山町（現大田原市）で肥料商を営んでいた故青木藤作氏が収集したものである。美術品の数は1,500件、4,212点にもものぼる。内容は 徳富蘇峰の書及び関係資料 歌川広重の肉筆浮世絵 広重・国貞（三代豊国）・国芳を中心とする浮世絵版画 小林清親を中心とする近代の版画 川村清雄の洋画及び関係資料 久保田米僊の日本画及び関係資料 江戸時代の版本 その他に分類される。

青木藤作氏は1870年熟田村狭間田（現氏家町）で生まれ、佐久山のほかに西那須野町や氏家町にも支店を出店していた。資産家であるとともに篤行家として慕われ、貧しい農家などに対する債券約1900人分を放棄したことから顕彰碑を建てようと言う動きもあった。

青木藤作氏は青年時代に徳富蘇峰の「国民の友」を読み蘇峰を東京に訪ね、生涯に渡り交流を深めた。また、歌川広重の作品を集めはじめたのは氏の別荘が神奈川県葉山町と接している横須賀市の秋谷海岸にあり、ここから眺めた景色が広重の作品にあったことがきっかけであった。青木藤作氏は1947年に77歳で佐久山において亡くなられたが、集められたコレクションは氏のご長男の住居（神戸市）に移された。しかし、平成7年の阪神大震災により住まいが倒壊してしまい、氏の孫である青木久子さんはコレクションの保存をどうするか思案されていた<sup>(註1)</sup>。

###### 青木久子さんの存在

第3章第2節(1)で取り上げた「いわむらかずお絵本原画展」のコーディネートを担当されたのが青木久子さんであった。青木さんはこの原画展での馬頭町図書館婦人ボランティアとの交流やいわむらかずお絵本の丘美術館の誘致・設立に尽力した馬頭町の方々の姿に心を打たれたそうである<sup>(註2)</sup>。その思いは、馬頭町広重美術館の建設が決定し1998年に栃木県立美術館で開催された「馬頭町所蔵・青木コレクション展図録」の中でこう綴られている。「あるとき、ふと思いついたのです。馬頭町に祖父のコレクションを所蔵、展示する美術館ができれば、作品にとってはお里帰りになる。そうなれば、馬頭町を訪れる人たちは、窯業史博物館では陶磁器などの歴史を学び、絵本の丘美術館では絵本の世界と周辺の自然を享受し、もうひとつの美術館では日本の伝統文化である浮世絵、書などの作

品を味わうことができる。すばらしいのではないかと夢はふくらんでいきました。」多くの美術館や美術関係者からコレクションの譲渡を望まれていたにも関わらず、青木久子さんが馬頭町を寄贈先に選んだのもまた馬頭町民の方々の人柄が大きいと言える。寄贈に当たっては青木久子さんの父親から「美術品にふさわしい美術館を建設し、寄贈品を一括保管し、適切な方法で展示して欲しい」等の要望が出されたと言い、寄贈までの経過は別表のとおりである(図表3-1)<sup>(註3)</sup>。

## (2) 馬頭町広重美術館設立までの道のり

### 設立までの壁

馬頭町広重美術館の設立に当たって懸念された最も大きな壁は経費であった。馬頭町は1997年から1999年の3ヵ年平均財政力指数が栃木県49市町村中47位、1999年の自主財源の割合48位、人口一人当たり地方債残高3位、一般財源の割合44位、地方税収入割合48位、住民一人当たり市町村民税49位と栃木県内の地方自治体の中でも財政力が弱い自治体と言える<sup>(註4)</sup>。町民の中には交通不便な町で集客が容易ではないと思われ運営経費が維持できるのか、長期的な目で考えると美術館は町の「お荷物」になるのではないかと、言った美術館設立に対して否定的な意見を持っていた方もあり、現在でも懸念している方は存在すると言う。

美術館の建設だけでなく開館後の管理運営のための経費が必要であることから美術館施設等の整備資金をより多く確保するために、1997年3月6日の町議会定例会では馬頭町美術館整備基金条例が制定された。寄付金の目標額は5,000万円で、1997年から2002年までの5年間に募集するものとした。同年4月には学識経験者を中心とする19名からなる馬頭町広重美術館建設委員会の第一回委員会が開催された。

また、栃木県議会では総務企画委員会と文教警察委員会が美術館建設計画のため馬頭町を訪れ激励の意見も出された<sup>(註5)</sup>。

### 美術館の基本構想の決定

1997年9月16日の第四回馬頭町広重美術館美術館建設委員会において国有林すくすくの森(林野庁) 役場第二庁舎敷地(町有地) 山村開発センター周辺(民有地) 下馬頭地区内(民有地)の四候補地から美術館の建設地として「役場第二庁舎敷地」が決定した。

「敷地面積を確保しやすいか」「将来の文化ゾーンの中核となれるか」「町中心部からの利便性」「建設・管理の経済性」「町の将来計画にプラスになるか」という視点から各候補地を比較検討し、約1.2ヘクタールの平坦な町有地であるた用地取得や造成の費用が少なく、後背地に指定史跡・森を擁し文化・芸術・歴史と森の一体性のイメージがあり、郷土資料館が隣接するため連携も容易であり、町中心部であるため利便性や保安面に優れ町中心部

の賑わいも創出しうる最適な場として役場第二庁舎敷地が選定された<sup>(註6)</sup>。

1997年10月18日から26日の9日間馬頭町郷土資料館において「広重名作展」が開催され、青木コレクションが初公開された。町民は大人500円の観覧料が無料とされた。これを記念とした町民フォーラムでは基調講演と「美術館とまちづくり」をテーマとしたパネルディスカッションが行われた。内覧会も含めた9日間で20,191人ももの来館があった。運営には町職員のほか、町民有志によるボランティアが展示品の警備や土日の交通誘導湯茶のサービス、観光案内などの協力を行った。広重名作展の影響が10月の美術館整備基金への寄付は200件以上に上ったと言う<sup>(註7)</sup>。

1998年2月10日馬頭町廣重美術館（仮称）の建設基本構想が決定した。美術館の望ましいあり方については馬頭町廣重美術館（仮称）建設委員会により7回に渡る会議で検討した。基本構想は「馬頭町の位置付けと美術館」「美術館の設置目的及び基本方針」「美術館の設置場所について」「美術館の位置付け」「美術館の機能」「事業運営管理について」「美術館を核とした地域づくりについて」「今後の課題の整理」の八項目から構成されている。基本構想の中で美術館の具体的な施設機能や各施設の面積・収容能力等も記され、全体で約1800平方メートルの敷地が必要とされている。美術館本体の整備は設備工事、什器・備品、展示ソフト等を含めて概ね十億円としているが、その他美術館周辺整備費が必要であるとしている<sup>(註8)</sup>。

### （3）美術館の資金面と栃木県の支援

栃木県では青木コレクションの寄贈を「栃木県民共有の財産」との位置付けを示し、1997年2月10日に公表された栃木県の新年度予算では美術館の設計費の半分の3,500万円が馬頭町への補助金として計上された。その他、県からの補助を受け総事業費の12億円は馬頭町と県（半分を拠出）で負担した<sup>(註9)</sup>。馬頭町で募った馬頭町美術館整備基金は開館までに13,000万円ほどになり、町ではこのうち5,000万円を建設費の一部として残りを作品購入費などに充てる考えとした。寄付金の内訳は一億円を突破した際の資料によると町内からの寄付金が約4,700万円（約46%）、馬頭町を除く県内が約3,600万円（約35%）、県外が約1,910万円（約19%）となっている<sup>(註10)</sup>。1998年9月8日の町議会定例会では一般会計補正予算に美術館に係るものとして14,431万円が計上されている。1998年度の一般会計予算が56億円であったことからすれば、美術館に係る費用は大きいものであった<sup>(註11)</sup>。

また、当時の渡辺栃木県知事が馬頭町廣重美術館の設立に賛同したことにより設立準備の人的な栃木県の支援として栃木県立美術館に学芸員（研究員）が一名増員された。1998年5月から1999年3月までの期間に美術館建築に関する指導・所蔵品の調査・整理法の指導・美術館運営の指導が行われた。現在はこの増員された一名の枠が葛生町に新設される博物館への協力枠となっている<sup>(註12)</sup>。

## 第2節 馬頭町広重美術館開館とその後

### (1) 開館後の入館者数と採算性

2000年11月3日から12月3日まで開催された開館最初の特別企画展「広重肉筆画名作展」は開館日数27日間で、36,497名の入館者数を記録した。一日あたりの平均は1,352名で、栃木県立美術館の過去5年間で最も入場者数が多かった企画展のそれが797名であるので入館者数が懸念されていたものの蓋を開けてみれば反響が大きかったと言える。2000年度は4企画展と1特別展で3月31日までの入場者数が72,737名、2001年度が前後期特別展1と8企画展で16,3816名、2002年度が11月24日現在で前後期特別展1と企画展3(内前後期1あり)で50,664名の入館者があった。開館以降の累計では214,480名にも上る<sup>(註13)</sup>。

採算性の面では、2001年度は所蔵品購入料を除く総費用7,000万円のうち5,000万円は入館料と図録等の販売で回収しこの中から光熱費なども支払われた。差額の2,000万円は馬頭町が負担したがこの主な内訳は人件費であった。一般的に公立美術館の収益は100円中13円であると言われていた中で総費用の約7割もの収益をあげたことは稀な例であり、とりあえず馬頭町広重美術館の運営は順調に乗り出したとのことであった<sup>(註14)</sup>。

設立時期から美術館に携わっている折井学芸員は「考えていたよりも入館者が集まってくれました。マスコミのおかげで知名度が上がったことも要因だと思います」と語る。また、前友の会会長である桑野弘さんは「馬頭町広重美術館の成功は”企画”の勝利ではないでしょうか。肉筆画の魅力も影響したと思います」と語られた。来館者アンケートの結果を見ると回帰性の割合が高いそうで、初めて訪れた利用者がまた来たいと感じるような企画づくりが功を奏していることは間違いない。

### (2) 美術館ボランティアの存在

馬頭町広重美術館では経費のスリム化のためにボランティアを導入している。美術館ボランティアの参加者数は友の会ボランティア部とボランティア会員数を合わせて約80名である。活動内容は美術館館内案内、町観光案内、各種受付、展示開設などの案内業務と展示室監視、清掃、生け花などの館内美化などの施設管理及び他美術館の情報、雑誌情報等の整理などの資料整理が主である。参加者のほとんどは馬頭町民の方であるが、宇都宮・小川町・烏山町・湯津上村・氏家町などの在住者が1.5割ほどいる。参加者はほとんど50歳代以上の主婦や男性で、元学校長が多く中には現職の町会議員の方もいる。

募集は2年目までは広報誌等で募集を呼びかけ美術館ボランティア講習会を行っていたが最近ではポスターを館内に掲示する程度であり、ボランティア活動の参加者が友人を紹介することもあると言う。また、地元の高校生の中に将来につなげていきたいと言うことで

ボランティア活動に参加している者もいるそうである。ボランティアの中心となる活動は展示室監視であるが、曜日毎に班編成を行っている（土日は二班に分かれている）。曜日毎に人数に偏りが出てしまい、特に日曜日の参加者が少ない。また、開館当時からの参加者には教育（ボランティア講座）が行き届いているが、途中からの参加者には研修教育が行き届いていない点が課題点であると言う。

実際に猪俣さんとおっしゃる監視のボランティアを開館以来活動されている方にお話を聞くことができた。ボランティアを始めたきっかけは白寄前町長の誘いであったと言う。戦時中に女学生であった猪俣さんは学生動員で中島飛行機に勤務しており、そのときの仲間の一人が白寄前町長であった。数年前に再会する集いがあり、その際に白寄前町長から馬頭町広重美術館の開館の話聞き共感した友人数名でボランティアに参加することを決めたとする。しかし猪俣さんは宇都宮在住であり馬頭町広重美術館に来るには往復3時間以上の労力と交通費3千円あまりの費用が必要である。なぜそこまでしてボランティア活動に熱心に取り組まれるのかをお尋ねしたところ、「活動を楽しむ考えですよ」と言う回答であった。「まず第一に負担にならないペースを保つこと」ボランティア活動と言うと気負ってしまって負担に感じがちであるが、そうならないように自分のペースを保つことが秘訣であるそうである。馬頭町在住のボランティアの方は週に一度活動をされているそうであるが、猪俣さんは遠方と言うこともあり月一回のペースで活動されているとのことであった。台風など天候に恵まれない日には美術館側から連絡が来て代替りの担当者を用意するので休んでくださいと言う配慮がなされるそうである。

「次に生活余力と楽しみをつくること」ボランティア活動をする時間は自分で設けなければならないものであるし、ただ家にいるよりは美術館に行こうと言う楽しみを持つことが第二の秘訣だそうである。馬頭町広重美術館の展示はおよそ月に一回替わり、これは猪俣さんがボランティア活動を行うペースと同じである。毎月新しく目の当たりにする展示をご自身が着物を好きであることから江戸の着物や帯の柄、帯の結び方、かんざしのデザイン、髪型など作品の服飾面に着目して鑑賞・勉強されているそうである。また、体験学習で中学生がボランティア活動に訪れたことが良い取り組みだと感じたそうで社会に出る前に社会見学をどんどん行うと人格形成によいのではないかと、言うこともおっしゃっていた。江戸の風俗、現代社会の教育面などボランティア活動を通して様々な教養の高まりを得られているようであった。

同じくボランティア活動に参加されている前友の会会長の桑原弘さんはこう語る。「私は馬頭町広重美術館が町に出来ることを嬉しく思い、建設には賛成でした。しかし、町の財政を考えたときにやはり厳しいものがある。美術館があって欲しいと言う気持ちから自分が協力できることはしようと思い活動しています。また、入館者数に対する馬頭町民の割合ははおそらく一割ほどで来館したことがない町民の方もまだいらっしゃいます。そうした方々と美術館の橋渡しをして、馬頭町広重美術館が段々と町に定着していければ良い

と考えています」いわむらかずお絵本の丘美術館においても、馬頭町広重美術館についても「それが町にあったらどんなに素敵だろう」と言う純粋な気持ちからそれらを支えるボランティア活動を続けている桑原さんの姿勢に、ボランティア活動の真髄を見た気がした。

### (3) 馬頭町広重美術館の今後の課題

開館2年を待たずに入館者数20万人を突破し順風満帆そうに見える馬頭町広重美術館であるが、美術館としての方向性はまだ模索中のようだ。馬頭町役場生涯学習課への問い合わせでは一年間の展示物のうち約55%から60%が借用でほとんどが個人コレクターによるものであるとのことであった。学芸員と言う立場から考えると、青木コレクション以外の所蔵品の拡充が必要であると感じているし、また「広重美術館」として歌川広重の作品を中心に扱う美術館として運営していくにしろ、現在所蔵しているものの他に作品が必要になると言うことであった。

一利用者として馬頭町広重美術館のあり方を考えるとき重点は美術館の普及活動に置くべきであると思う。聞き取り調査をお願いした方々は町役場関係者が主だったこともあり、美術館の存在の是非について否定的な意見を聞くことはなかった。しかし、町民の方との雑談などから現在も否定的な意見を持っている人もいるし、肯定的な意見を持っていたとしても実際には美術館を訪れたことがない町民の方がまだ沢山いると言うことを聞いた。

町としては「広報ばとう」で「廣重だより」と言うコーナーを設けて美術館の設立から詳しく情報を提供し、現在では裏面を馬頭町広重美術館の所蔵品を学芸員が解説するコーナーとしており、町民に向けて広く普及活動を行っていると言える。しかし、多数の町民の方に話を聞いたわけではないので真相は分からないが、実際に馬頭町広重美術館が町に根付いているのか確信が持てなかった。また、美術館設立のきっかけを作った桑野さんにしろ馬頭町図書館婦人ボランティアの方々にしろ以前は教育関係者であり、現在は一町民であっても行政の担い手として一役買っているように感じたのも事実である。馬頭町のキーパーソンである桑野さんのお話を聞いていると桑野さんご自身はとても町と美術館を大切に思っているのがよく分かったが、こうした一部の熱心な方々に委ねられてしまっている面もあるのではないかと感じた。第3章第2節(2)でも述べたが桑野さんが美術館を支える理由の一つに馬頭町民への普及と言う目的がある。普及担当の職員がいる栃木県立美術館とは違って、馬頭町広重美術館にはボランティアの中にこうした意識を持った人材がいると言うことが驚きだった。これぞ「公共を支える民」ではないかと思う。

私が2002年11月に訪れた際には「特別展 江戸の旅 東海道五拾三次展(後期)」が開催されていた。この企画は「五拾三次が見たい」と言う来館者アンケートの要望を基に実現したそうである。基本構想の「誰もが楽しめる」と言う点を実践した例であると思うが、作品の一つ一つに解説があり江戸の風俗も楽しめる分かりやすい配慮がなされていたため人物の表情、町の様子などに面白みを感じる事が出来た。この点は各々美術館によ

って異なるところであり、知識が乏しい筆者にとってはこれがあるのとないのとは鑑賞の満足度が大きく異なる。浮世絵は江戸時代の庶民の娯楽であったそうだが現代でも作品を気軽に楽しめるような心遣いを今後も続けて欲しい。

図表 3 - 1

年	月 日	事 柄
1997 年	4 月 14 日	青木コレクションの寄贈について青木久子さんからいわむらかずおさん・いわむらかずお絵本美術館建設推進委員会会長桑野弘さんを通して白寄町長に打診がある。
	6 月 14 日	青木久子さん来町、コレクションの内容説明を受ける。
	7 月 3 日	寄贈を受ける方針で白寄町長らが青木さんを東京へ訪問する。
	7 月 30 日	青木コレクションの受け入れについて青木さんと東京にて協議する。
	9 月 25 日	白寄町長らが歌川広重展（小田急百貨店）などを見学する。
	10 月 5 日	7 日まで青木コレクション第一回引渡し。肉筆浮世絵。版画・書籍等。
	11 月 14 日	町議会協議会で美術品の内容を説明。
	11 月 22 日	23 日まで青木コレクション第二回引渡し。工芸品・書籍等。
	12 月 25 日	徳富蘇峰鑑定・評価（徳富蘇峰記念館高野静子学芸員）、美術品鑑定・評価（学習院大学小林忠教授、萩泉堂小林克弘氏）。
1998 年	1 月 10 日	町議会協議会で青木コレクションの鑑定結果について説明。美術品寄贈について記者会見。
	2 月 3 日	町議会臨時会で「条件付き寄付」議決。

資料：『広報ばとう』1997 年 3 月号から。

（註 1）『広報ばとう』1997 年 3 月号。

（註 2）栃木県立美術館、馬頭町美術館準備室編『馬頭町所蔵・青木コレクション展図録』（1998 年）P5

（註 3）『広報ばとう』1997 年 3 月号

（註 4）栃木県統計指標ふるさとウォッチング平成 13 年度版。

（註 5）『広報ばとう』1997 年 4 月号。

（註 6）『広報ばとう』1997 年 10 月号

（註 7）『広報ばとう』1997 年 11 月号。

（註 8）『広報ばとう』1998 年 3 月号。

（註 9）下野新聞 2000 年 10 月 31 日付。

（註 10）『広報ばとう』1998 年 7 月号。

（註 11）『広報ばとう』1998 年 10 月号。

（註 12）2002 年 12 月 6 日栃木県立美術館野原さんへインタビュー。

（註 13）馬頭町広重美術館入館者数資料。

（註 14）馬頭町役場生涯学習課松崎さんへ電話問い合わせ。